

大倉秀之さんの桃源郷 汐入

「ミイラ取りがミイラになりましたね。」

大倉秀之さんは、友人から見せられた汐入（南千住八丁目）の写真に刺激を受けて、この町を記録するようになり、すっかり汐入の魅力に惹かれてしまいました。昭和63年（1988）4月より平成18（2006）年まで、仕事の休みを利用して、変わりに行く汐入を撮影した写真は、3万6千枚近くになります。

昭和44年、東京都からの江東再開発基本構想が産声をあげ、世に出たときには汐入の多くの住人にとっては、この構想は縁遠いものでした。昭和48年に白鬚西地区の市街地再開発計画素案が出され、住民の多くに戸惑いがよぎりました。それから、15年の歳月を経ていよいよ実施段階に入り昭和63年12月にけやき通り北壺番館が着工されました。

「やもりが窓ガラスに張り付き、こうもりが舞い、春にはひばりが、夏になるとヨシキリがやって来ました。」

当時、汐入地区は1308世帯、3694人が住んでいました。（昭和63年1月現在）

「夏みかんと柿の木が多かったで

す」

小さな路地に面した住宅の軒先や低木に吊るされた輪切りのミカンやリンゴをいばみに、毎年春になると沢山のメジロがやって来ました。珍しいといえば、青大将もいたりして、ここでは当たり前前の光景でした。

「田舎で、のんびりしてました」

大倉さんが

写真撮影に歩

いていると

「あがつてい

けよ」と気軽

に声を掛けら

れたこともし

ばしばあった

そうです。

「写真を写し

て」とせがむ子どももいて、そこには人間

関係が温かな下町がありました。

ニチボウの跡地には、サッカー場やテニ

スコートがありました。幅8m、長さ25m

の汐入プールは、閑散としていました。

「迷路でした」

木造家屋ばかりで路地が多く、物干し台

がありました。この地区では、88%が借家

人、借地人で長屋もありました。

「葦が生えていました」

都から買い上げられて空き地になった土



1988年4月典型的な汐入の町並み
大倉秀之氏撮影

地には、バラ線が張り巡らされ、葦が繁っていました。

「最後まで残っていたのは高橋造船所でした」

高橋造船所は三代続いた造船所です。隅田川の波打ち際にあり、川に面した船台で船の修繕をしていました。台風が去ったあとの船台に亀が歩いているのを目にしたことがありました。区内唯一の川べりが残る貴重な場所でした。その造船所も平成15年3月に取り壊されてなくなりました。

「町自体がなくなって、淋しい」

しかし、注目されて有名になる前になくなってよかったのかもしれない。ともおっしゃっております。

岡目八目、汐入に住んでいた当事者の方達が気がつかないことを、傍観者である大倉さんは、汐入の良さを感じて冷静にレンズを通して見つめてこられたのでしよう。

現在、南千住8丁目は18世帯、1万932人（平成25年1月）が暮らしており、開発前の3倍の世帯数、人口となっております。

開発は防災上、必要だったのでしようが、お味噌貸してと気軽に近所で行き来できる環境と自然は、失われてしまいました。汐入の歴史の記録は、大倉さんのネガと心の中にあります。